

祖母が骨折をして病院に運ばれた。五時間の大手術の後、リハビリを含め約二ヶ月間の入院となった。祖父は、自転車で病院と自宅を一日に何往復もし、祖母のお世話をした。

「若か頃から、あれ(祖母)には苦勞ばかりだったけん、お返しはせんといかん。」  
祖父は、定年退職後十八年間勤め続けてきた市のシルバー人材派遣をきっぱりと辞めた。

祖母の退院の時、私は嬉しさの反面、不安があった。それは、年金で暮らしている祖父が手術費や入院費を払えるのだろうかということだ。

「おいたちは年寄りやけん、一割でよかと。」  
心配している私に祖父は言った。

そこで、私は医療費負担について調べてみた。医療費は、七十五歳以上になると一割負担ですみ、七十歳以上と六歳以下では二割負担、それ以外の年齢では三割負担になっている。それに加え、私たちが住んでいる佐賀市では、小学生までは一受診当たり五百円ですむ制度がある。病気や怪我が多くなる年代や収入が少なくなる年代、子育て等で出費が増える年代に配慮がされている負担割合であると思った。また、働き盛りの年代であっても七割は国がまかなってくれるので安心だ。

さらに、確定申告をすれば、高額医療控除が受けられ、既に支払った税金の中から一定の割合で戻ってくるということも知った。

「最近では領収証ばとっておかんでも、年末に病院から一括で支払った分ば送ってくるし、簡単に確定申告もできるようになったとよ。」  
と祖父は続けた。

このようにして、私の心配はなくなっていった。もちろん、年金で生活している祖父らが、怪我や病気をしても安心して暮らしていけるのは、税金のおかげだ。しかし、祖父らは税金の恩恵を受けているばかりではないことも分かった。

祖父は、海技学校を卒業後、定年退職をするまでの四十三年間を船員として働いた。何ヶ月も掛けて東南アジアやヨーロッパ、南北アメリカに行っていたそう。私が幼い頃は、貨物船が運河を渡る話を聞いたり、祖父宅に飾ってあるインド象の木彫りにまたがらせてもらったりしてワクワクしたものだ。その間祖父は家族を養うだけでなく、社会の担い手としての役割をしっかりと果たしてきた。また、祖母はそんな祖父を支えてきた。

祖父は今年で七十九歳、随分と力も弱くなったし体自体も小さくなった印象を受ける。現在の社会の担い手となっているのは父たちの代であるし、もう少ししたら私もそこに加わる。このようにして社会は成り立っているのだ。社会の担い手としての自覚をもち責任を果たすこと、税や福祉制度について正しい知識をもつこと、そして本当に困った時には互いに共助の精神をもち、その恩恵を受けてもいいこと等、社会人の大先輩である祖父の姿や言葉から学んだ。